

“地元”市民のスポーツ好感度調査

後藤 新弥*・遠藤 大哉**

要 約

“地元”柏市の「ふつうの人」のスポーツへの愛好度や、スポーツ活動の実態を等身大で探ろうと、学生らとともに柏市駅前「町行く人」を対象に調査したまとめ報告である。

複数の項目に亘ってアンケートを実施した結果、以下のような興味深い傾向が抽出された。

- * プロサッカーは好感度が高かった。ところが、地元柏レイソルの大看板の下で調査したにもかかわらず、レイソルの名前を言えない人が2割以上いた。
- * さらに、地元柏レイソルの選手を1人も知らない人が6割近かった。一方日本代表なら3人以上の名前を知っている人が9割近かった。Jリーグ側は「地元密着」を掲げているが、現状は地元未着である
- * 大相撲を「大嫌い」と決めつける人が3割近くいた。八百長疑惑などが背景か。
- * 東京五輪の「招致活動」に好感を抱いたのは半数に満たなかった（7月時点）。
- * 文武両道という概念を「重要である」と答えたのは、平成生まれが約44%、大人世代が38%で、若い人の方がスポーツの倫理観を重要視している傾向がうかがわれた。
- * 「日常的にスポーツをしている」人は全体の42%を占めたが、「したいけどしていない」人が27%に達し、スポーツ行政への大きな課題が見えてきた。
- * 「町に行くふつうの人」のスポーツ活動へのさらなる支援が必要だと痛感した。東京五輪開催への最優先課題は、イベントとしての成功やトップ選手のメダル数ではなく、実は日本のスポーツの実数値であり、またその土台である、「ふつうの人のスポーツ活動」の支援促進ではないだろうか。

キーワード：Jリーグサッカー 地元密着 市民のスポーツ活動 テレビ

はじめに

一般市民は、スポーツに対して日常どのような意識を持っているか、その実態を把握するために、江戸川大学経営社会学科後藤ゼミの2～4年生とともに、JR柏駅東口で一般市民アンケート調査を実施した。以下はその結果の報告である。

「スポーツが好きですか」「貴方はスポーツをしていますか」といった調査は、文科省をはじめスポーツ団体、興業社などが各種行ってきたが、こうした調査結果が広範囲な本格調査であるにも関

わらず、あるいは逆にそのせいなのか、「自分たちの現実の周囲」とは微妙に異なる印象をしばしば受けている。

調査方法やその結果の分析方法、発表方法によって、印象が大きく異なってくるのは、自然なことでもある。

そこで今回は“地元”柏市での等身大の調査を行うこととした。大規模な全国調査とは量的な部分で劣ることは否めないが、むしろ「マンツーマン」でのインタビュー部分をまとめて反映させることで、より「実際の市民」の声を反映することができるはずだと考えた。

この等身大調査では、以下のような具体的な質問項目が予め検討された。

- 1) 各種のプロチームが“地元密着”をアピー

2013年11月29日受付

* 江戸川大学 社会学科教授

** 江戸川大学 社会学科非常勤講師

⑫スポーツ選手のどのような部分に共感・感動されますか？（いくつでも○を）

- a) より大きな世界にチャレンジしていく**挑戦者**の努力と勇気の姿、
- b) 才能，体力，集中力の**すごさ**，非凡さを発揮するプレーや**緊迫感**
- c) 礼儀正しく，**人間的にも教養や成長**，優しさを感じさせる姿
- d) 逆境や**試練**，ケガ，故障に負けず，乗り越えていこうとする**不屈さ**
- e) 子供たちの**憧れ**となって，夢を与え，社会に**活気**を与える姿

その他 _____

⑬**文武両道**という言葉が昔よく使われました。現在のスポーツにおいても？

- 1) 非常に重要 2) 大事だが最優先事項ではない 3) あまり重要ではない

柏市スポーツクイズ

⑭地元柏市のプロサッカーチームの愛称をご存じですか？ 1) はい 2) いいえ

⑮チームの選手名を何人か，ご存じですか？ 1) はい 2) いいえ

⑯日本代表では，本田，香川以外の選手をご存じですか？ 1) はい 2) いいえ

⑰柏市のバスケットボールの強豪チーム「日立サンロッカーズ」をご存じでしたか？
1) はい 2) いいえ

⑱サッカーの種目に，フットサルというスポーツがあります。ご存じでしょうか？

- 1) やったことがある 2) やってみたい 3) 知ってはいる 3) 知らない

市民スポーツの今後の課題について

⑲私たちは，ごくふつうの市民（働く人など）がさらに気楽に，日常的にスポーツに参加できるようになれば，と考えます。現在は，何かスポーツ活動をして？

- 1) している 2) したいが，していない 3) していない

⑳上記1) 2) の，している方，したい方への共通質問です。現在の悩み，問題点は？

いくつでも○を

- a) 気持はあるが，**体力**，気力に自信がない，年齢的にきつい
- b) 参加の**機会**がすくない，参加の仕方がよくわからない
- c) 仕事や家事でその**時間**がきつい，取りにくい
- d) 場所や**施設**がない，少ない
- e) **費用**がかかる 其他 _____

㉑**している方**にお聞きします。メインの種目は？（おひとつだけ） _____

㉒競技団体などに選手登録して？ 1) いる 2) いない

㉓唐突で失礼ですが，日常的な平均睡眠時間は？ _____ 時間

㉔試験や試合の前夜，睡眠時間が不足することがあります。翌日への影響は？

- 1) マイナスの影響がかなり出る 2) かえって成績がいいことも 3) 影響は少ない

お忙しいところ，本当にありがとうございました。御礼とともに，皆様のご健康と地元スポーツのよりよい発展を心よりお祈り申し上げます。私たちも学究にいっそう頑張る所存です。今後とも江戸川大学をよろしく願い申し上げます。 後藤ゼミー同

(担当教授 後藤新弥 090 - 1432 - 1624)

(質問票は以上)

第2章 スポーツ好感度 集計結果 ～その1 意識～

2-1 集計結果表

調査は以下のような内容となった。

回答者総数 182人

年齢 15歳～85歳(単純平均 27.0歳)

男性 46.7% 女性 53.3%

設問ごとの単純な集計結果の数値は表1の通りである。

なお、二次的な分析などで必要な回答者の年齢層別の対照データとして、回答データを以下の3つの項目について、それぞれ2つのグループに分け、それぞれの数値を項目別に抽出した。この結果内容については後章で分析考証を試みる。

①年齢

若年層＝平成生まれ(24歳以下) 132人

平均18.1歳(62.6%)

大正、昭和生まれ＝大人世代(25歳以上) 50人

平均50.6歳(27.4%)

②部活動の経験

経験あり 69.2%

経験なし 20.8%

③性別

男性 平均年齢 15.5歳 46.7%

女性 平均年齢 23.4歳 53.3%

2-2 スポーツの種目別好感度

調査対象としたのは、JR柏駅東口を通過する高齢者、高校生、大学生、勤め人など、いわゆる「ふつうの市民」で、これらふつうの人たちが、スポーツに好感を抱いているか、抱いているとしたらどんなスポーツに最も関心があるのかの「現実のありさま」を探るのが、この調査の狙いだ。

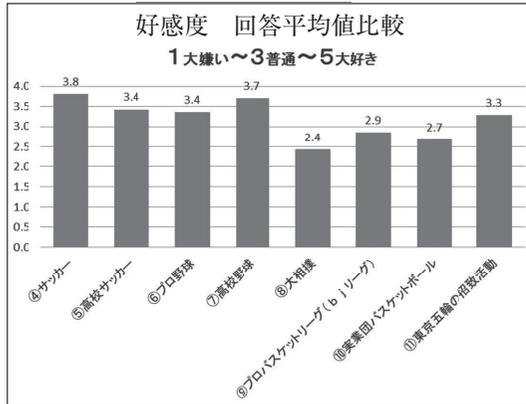
表1 アンケート結果全体集計表

表1 アンケート結果全体集計表		個数	平均	最大	最少	a(1)	%	b(2)	%	c(3)	%	d(4)	%	e(5)	%
①年齢		182	27.0	85	15										
②性別1)男性 2)女性	1, 2	182	1.5	2	1	85	46.7%	97	53.3%						
③部活動の経験?	1, 2	182	1.3	2	1	126	69.2%	56	30.8%						
④サッカー	5～1の数値	182	3.8	5	1	2	1.1%	9	4.9%	46	25.3%	90	49.5%	35	19.2%
⑤高校サッカー	5～1の数値	182	3.4	5	1	11	6.0%	14	7.7%	64	35.2%	72	39.6%	21	11.5%
⑥プロ野球	5～1の数値	182	3.4	5	1	13	7.1%	21	11.5%	60	33.0%	63	34.6%	25	13.7%
⑦高校野球	5～1の数値	182	3.7	5	1	8	4.4%	17	9.3%	43	23.6%	67	36.8%	47	25.8%
⑧大相撲	5～1の数値	182	2.4	5	1	51	28.0%	33	18.1%	73	40.1%	19	10.4%	6	3.3%
⑨プロバスケットリーグ(bjリーグ)	5～1の数値	182	2.9	5	1	31	17.0%	37	20.3%	57	31.3%	41	22.5%	16	8.8%
⑩実業団バスケットボール	5～1の数値	182	2.7	5	1	37	20.3%	37	20.3%	66	36.3%	32	17.6%	10	5.5%
⑪東京五輪の招致活動	5～1の数値	182	3.3	5	1	19	10.4%	12	6.6%	68	37.4%	64	35.2%	19	10.4%
⑫選手のどんな点に感動	a～e(複可)	182				112	61.5%	97	53.3%	68	37.4%	65	35.7%	92	50.5%
⑬文武両道	1～3	182	1.6	3	1	77	42.3%	93	51.1%	12	6.6%				
⑭Jチーム名	1, 2	182	1.2	2	1	142	78.0%	40	22.0%	0	0.0%				
⑮選手名	1, 2	182	1.6	2	1	73	40.1%	109	59.9%						
⑯代表本田、香川以外	1, 2	182	1.1	2	1	158	86.8%	24	13.2%						
⑰日立サンロッカーズ	1, 2	182	1.9	2	1	22	12.1%	160	87.9%						
⑱フットサル	1～4	182	2.1	4	1	73	40.1%	17	9.3%	89	48.9%	3	1.6%		
⑲スポーツ活動を?	1～3	182	1.9	3	1	76	41.8%	49	26.9%	57	31.3%				
⑳活動の障害になる点	a～e(複可)	134				41	30.6%	35	26.1%	42	31.3%	36	26.9%	33	24.6%
㉑種目		58													
㉒選手登録	1, 2	86	1.6	2	1	37	43.0%	49	57.0%						
㉓睡眠時間	0.5単位	182	6.2	10	2										
㉔睡眠不足の影響は?	1～3	182	2.0	3	1	81	44.5%	25	13.7%	76	41.8%				

最初に、どのようなスポーツ（競技種目）に好感を抱いているかを調査した。

集計結果はすでに2-1に掲載したが、該当部分をグラフ1に表した。

グラフ1 好感度平均値比較グラフ



好感度が高いを5、ふつうを3、大嫌いを1とした回答結果をまとめると、各種目の平均値ではサッカー（プロサッカー、Jリーグを指す）が3.8と最も高く、Jリーグ「柏レイソル」のお膝元であることを改めて認識した。高齢者も「大好き」と答える例が多かった。この点では、柏レイソルの知名度は十分に浸透していることが判明した。

また高校野球が盛んな地域でもあることから、高校野球も平均値3.7と、プロサッカーに次ぐ関心と好感度を示している。ただし、プロ野球は千葉ロッテマリーンズの「守備範囲」にもかかわらず、平均値が3.4と、それほど好感や関心が持たれていないことが数値に表れた。

また「まあまあ好き」を示す「回答選択肢4」は、ふつうよりは好きだが、「大好き」「熱狂的なファン」ではない人に選んでもらったもので、好感度の回答で最も集中しやすかったのがこの4だった。一方で、「本当に大好き」を占める5を選ぶ例はプロサッカーに於いても比較的少なめだった。

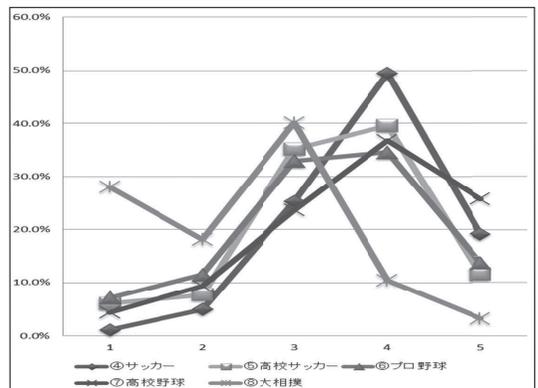
この点はグラフ2でも分かるように、人気の高いプロサッカーでも、5を選んだ人は19.2%で、2割に達していなかった。「地元だから、みな

熱狂的サポーター」というほどのイメージは、ここでは見えなかった。

興味深かったのは大相撲で、平均値は2.4と「ふつう」の3をかなり下回り、市民の間での関心が低い、あるいはどちらかという「嫌われている」という予想外の結果が採集された。

特に、「嫌い」と断言する1をマークした人が、全体の28.0%に達したことは注目に値する。他の種目では観察できない現象だった。その理由（市民感情）として、女子高校生の多くは「かっこ悪い」「テレビ（バラエティや情報番組など）であまり取り上げられないのでよく知らない」「年寄り臭い」などを理由として述べていたが、「部屋での暴力事件でイメージを崩した」「野球賭博に関わったり、八百長があったりで、神聖さがなくなってしまった」などもその理由としていた。大人世代はその大半が「外国人力士の活躍、日本人の低迷」を理由としていた。相撲関係者にとっても、このデータを重視し、今後の課題とする必要がある。

グラフ2 好感度比較チャート



なお、この項目の全種目平均好感度値は3.18だった。

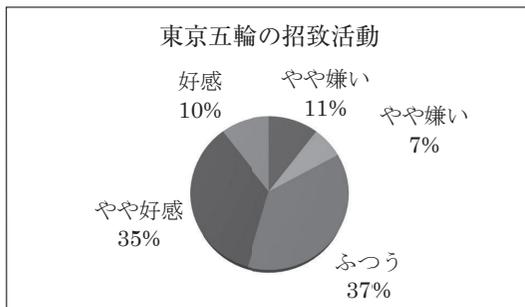
2-3 東京五輪は政治主導型

もう一つ興味深い結果となったのは、付随的に設定した設問、「東京五輪の招致活動についての印象」で、これまでの他のアンケート調査でも「積

極的に支援する」が半数前後で、東京五輪招致活動最大のネックは市民の関心の薄いことである、といった報告がしきりに出されていた。

本調査でもその点を明示的にデータ抽出したかったのだが、結果的にはグラフ3の通り好感、すなわち「招致活動に積極的賛成」は全体の45%にとどまった。もちろん柏は千葉県であり、東京への関心は比較的薄いのが、同時にベッドタウンとしての機能も高いわけで、本来であればもっと好感がもたれて良いはずである。

グラフ3 五輪招致活動の好感度



インタビュー調査では、「活動の仕方」そのものへの疑問や、「招致テーマ」に関する不透明さ、不明確さなどを挙げる人が多かった。五輪そのものへの反感ではなく、招致活動そのものへの不協和音が目立ち、そうした背景から「五輪をどうしても呼んで欲しい」というほどの熱意には、「ふつうの市民」は至っていなかったことがはっきりした。

東京五輪招致は結果的に成功したが、市民の気持ちから押し上げたものではない、「官主導」型であったことがこの結果からうかがわれる。

2-4 スポーツの魅力は

ここではスポーツやスポーツ選手のどこが好きなのか、どんなところに共感や感動を覚えるのかという質問を設定し、「ふつうの人」の心情を探ることを試みた。ある意味では、スポーツの本質がどの程度理解され、あるいは重視されているかを調べる「スポーツの本質理解度」テストでもあり、スポーツのヒーローと人気芸能人との区別がつい

ているのか、といったニュアンスをこめた調査でもあった。

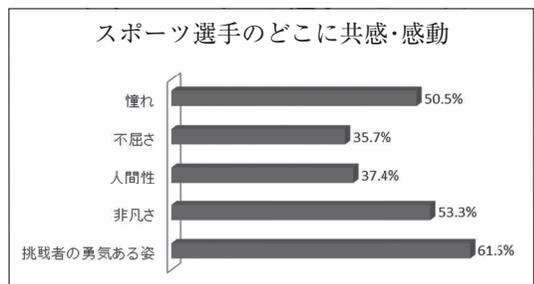
第一章で記した調査表の設定問を再掲載すると、
⑫スポーツ選手のどのような部分に共感・感動されますか？（いくつでも○を）

- より大きな世界にチャレンジしていく挑戦者の努力と勇気の姿
- 才能、体力、集中力のすごさ、非凡さを発揮するプレーや緊迫感
- 礼儀正しく、人間的にも教養や成長、優しさを感じさせる姿
- 逆境や試練、ケガ、故障に負けず、乗り越えていこうとする不屈さ
- 子供たちの憧れとなって、夢を与え、社会に活力を与える姿

前述の通り、もしスポーツとは何か市民の間にも深く浸透し、理解されているなら、選手がケガや生涯を乗り越えていく不屈の姿や、礼儀正しさや人間性といった内面部分にその原点を求めていく人が多いかもしれない。一方で、「テレビでよく取り上げられているから」「子供たちが憧れるから」「カッコいいから」といった外面的な部分も、多くの人が選択するのではないだろうかと推測された。また、若い人は外面的な部分、年配者は内面的な部分を強調するのでは、という単純な見方があった。

結果的にはグラフ4のように、「世界に挑戦していく」ヒーロー像をスポーツに求めている人が61.5%に達し、最も回答が多かった。また、非凡な才能や体力、プレーといった「より優れた人

グラフ4 どこに共感を

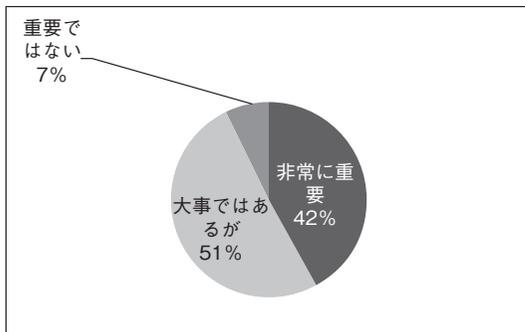


たち」としてのスポーツ選手像に感動すると答えた人が53・3%。子供たちの憧れとして活躍することに回答した人が50・5%だった。

いずれも「ヒーロー像」としてスポーツ選手を捉えている傾向が強く、“有名人志向”という点では、芸能人への憧れと共通した部分が多いのかもしれない。逆に内面的な部分（人間性、不屈さ）への共感・感動度はともに30%台にとどまった。

この部分を別角度から探求しようと試みたのが、設問⑬の「文武両道をどう思いますか」だ（グラフ5参照）。

グラフ5 文武両道



一般常識から、文武両道は非常に大切であり、特にスポーツに於いてはその活動の根源精神でもある、という回答がほとんどではないか、という予測があったが、実際には「重要ではあるが、それが最優先事項ではない」が半数以上を占め、「重要ではない」が7%もあった。

非常に重要である、の回答は42%で、「大事ではあるが」とまとめれば肯定派が93%と大勢を占めたが、回答結果は予想したよりも「重要とは思っていないらしい」方向に振れた。なおこれらの結果については、年齢層別や性別、部活経験の有無などから、後章で二次分析を試みる。

2-5 地元密着というより地元未着

近年は各マスコミでもスポーツ、特にプロサッカーやプロバスケットボール（bjリーグ）などの「地元密着」の活動を取り上げる傾向が強くなり、プロ興行が単なる利潤追求の興業ではなく、地元

と密着して社会貢献を果たし、地元の市民と強い絆を結んでいる、といったイメージが強調されている。大手新聞も「地元密着」の連載シリーズなどを掲載したり、スポーツが新しい時代に入ったのだと強調している。

だが、「本当にそうなのか？」。

Jリーグが毎年発表している観客調査の2012年版でも、そのサマリーではこう報告されている。

Jリーグとコミュニティ：Jリーグとコミュニティとの関係については、ホームタウンで「Jクラブが重要な役割を果たしている」（83.3%）、「大きな貢献をしている」（78.6%）、「若い人たちの生活にいい影響を与えている」（77.2%）という意見が支持されており、肯定的な評価が目立った。<http://www.j-league.or.jp/aboutj/document/spectator-survey.html>

ここでは調査対象の8割近くが「地元貢献」を認めている。いかにも、Jリーグが追求する地元密着型のクラブが増え、目的を果たしているかのようだが、いうまでもなく、これは観客の、スタジアムでの出口調査のデータが基準となっている。すなわち、Jリーグサッカーを見に来た人を対象に調査したものであり、実際の「地元社会」を対象とした調査ではない。

本学でもこうした出口調査を行ってサッカーの人気や、今後の課題を探った例は幾多あるが、これだけでは本当に地元密着なのかどうかは分からない。

マスコミの多くも、スポーツ興業者の側からの目線だけで「地元密着活動」を取り上げるのがふつうで「スポーツ興業と全く関係のない町や村のじいさん、ばあさんはどう見ているのか」まできちんと取材し、あるいは調査して記事や番組にする例は、まずないといっていいたいだろう。

社会とスポーツのあり方を考える上で、「スポーツのファン」に着目することも大切だが、社会はそれだけで構成されているわけではない。むしろ「ファンではない人がどう感じているか」こそが、課題ではないだろうか。

今回のアンケート2-2項などでも分かるよう

に、スポーツ、あるいは特定のスポーツ種目が「嫌い」と答える人もいる。少数派かもしれないが、それが社会の現実であり、これまで多く発表・報道されてきたスポーツ意識調査や、人気調査はあまりにも否定派(?)を軽視しすぎていた感否めない。

事実。Jリーグ自身の調査の中でも、別の形式の質問で「Jリーグのイメージは」に対し、「地域社会とのつながりを感じる」と答えた観客は、12～16%にとどまっていると報告されている。

では柏市民はどうか。レイソルのお膝元だけに、2-2項で述べたように、サッカー(Jリーグ)が「大好き」が19.2%、「まあまあ好き」は49.2%。併せて7割近くが「好き」と積極的に答えている。

本当にそうか。そこで、「本当? じゃあ、柏にあるプロチームの名前を言えますか」と意地悪く聴いてみた。これが設問⑭だ。結果、全体の78%が「知っている」と正解を述べた。アンケートは柏レイソルの大看板の真下で行った。好きと答えた人はほぼ全員、少なくともレイソルの名前は知っていることになる。

だが。

「本当に好きなの? じゃあ選手の名前を一人でもいいから、教えてください」と、食い下がることにした。これが設問⑮だ。

なんと、選手の名前を一人も言えない人が、6割近く(59.9%)もいた。ファンを自称するが、実は選手の名前など一人も知らないのである。

これでは、マスコミを含めた文化環境の影響で「サッカーが好き」と答えるだけで、実際にはサッカーもよく知らないのではないか、ましてやチームと地元のふれあいなど絵空事ではないのか、という見方も沸いてくる。

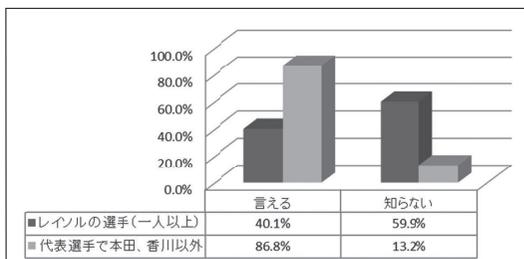
そこで「では日本代表の選手名はどうですか?

本田、香川が有名ですが、あと一人、誰か言えますか」と訪ねたところ(設問⑯)、興味深いことに86.8%が「知っている」と答え、事実、遠藤らの名前が確認された(グラフ6参照)。

地元のレイソル選手の名前は知らない、しかし代表なら知っている。

実は本調査時期は、日本がブラジルW杯への進出を決めた直後だった。テレビ・新聞では日本代表チームが大きく報じられていたわけで、データの数値背景がここにある。試合の中継だけでなく、情報番組やバラエティ案組で取り上げられることが非常に多かったためだ。しかし、柏レイソルが日常、同じように報じられることはない。裏

グラフ6 選手の名前言えますか



を返せば、

日本代表サッカーのことは、テレビの情報番組でよく見るから比較的よく知っている、W杯予選通過を果たし、快感を味わわせてくれた点でサッカーというスポーツが好きだ。しかし地元サッカーチームについては、実はよく知らない、関心もあまりない。あるいはサッカーというスポーツ自体にも本当は関心はあまりない

といった構図も、浮き上がってくる。

もとより、柏レイソルに限らず、各チームのスタッフ、特に現場のスタッフは必死に「地元密着」を現実の土台に築こうと努力を続けている。それでも、この夢は未完の大器。きつい言い方をすれば、むしろ「地元未着」が現状ではないだろうか。

裏を返せば、将来に大きな可能性をまだまだ残していると言うことであり、その点ではむしろ明るい材料でもある。リーグやチーム経営者が真摯に取り組むべき課題だろう。

第3章 年齢、性別、部活体験の有無による二次分析

この章では、第2章で述べた「スポーツ好感度～意識～」の全体の結果と分析を、さらに現実

的な考察の土台とするために、以下の三つのカテゴリーで、それぞれの特徴を洗い出してみた。

女性

①年齢層別の比較

平成生まれ（24歳以下）＝若年層

それ以上の「大人」（25歳以上）＝大人世代

②男女比較 男性

③部活動経験体験あり

なし

3-1 年齢層別

年齢層別でまとめたものが添付の表2である。各項の上段が若年層、下段が大人世代だ。

表2 集計年齢層別比較

柏駅前市民スポーツ好感度調査
試算比較表 若年層対大人世代
上段 若年層（平成生まれ）
下段 大人世代（大正、昭和）

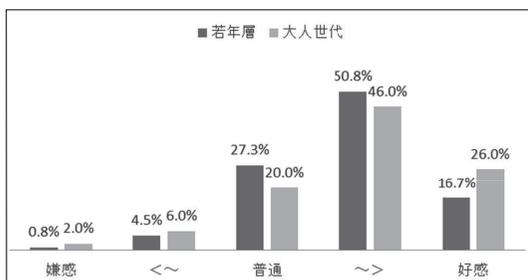
	平均	嫌感	<~	普通	~>	好感
①年齢	27.0					
①年齢	18.1					
①年齢	50.6					
	平均	男性	女性			
②性別 1)男性 2)女性	1.5	46.7%	53.3%			
②性別 1)男性 2)女性	1.5	50.0%	50.0%			
②性別 1)男性 2)女性	1.6	38.0%	62.0%			
	平均	イエス	ノー			
③部活動の経験?	1.3	69.2%	30.8%			
③部活動の経験?	1.3	71.2%	28.8%			
③部活動の経験?	1.4	64.0%	36.0%			
	平均	嫌感	<~	普通	~>	好感
④サッカー	3.8	1.1%	4.9%	25.3%	49.5%	19.2%
④サッカー	3.8	0.8%	4.5%	27.3%	50.8%	16.7%
④サッカー	3.9	2.0%	6.0%	20.0%	46.0%	26.0%
⑤高校サッカー	3.4	6.0%	7.7%	35.2%	39.6%	11.5%
⑤高校サッカー	3.5	3.8%	9.8%	33.3%	41.7%	11.4%
⑤高校サッカー	3.3	12.0%	2.0%	40.0%	34.0%	12.0%
⑥プロ野球	3.4	7.1%	11.5%	33.0%	34.6%	13.7%
⑥プロ野球	3.4	6.8%	11.4%	31.8%	35.6%	14.4%
⑥プロ野球	3.3	8.0%	12.0%	36.0%	32.0%	12.0%
⑦高校野球	3.7	4.4%	9.3%	23.6%	36.8%	25.8%
⑦高校野球	3.6	5.3%	10.6%	24.2%	37.9%	22.0%
⑦高校野球	4.0	2.0%	6.0%	22.0%	34.0%	36.0%
⑧大相撲	2.4	28.0%	18.1%	40.1%	10.4%	3.3%
⑧大相撲	2.3	31.8%	19.7%	40.2%	6.8%	1.5%
⑧大相撲	2.9	18.0%	14.0%	40.0%	20.0%	8.0%
⑨プロバスケットリーグ (bjリーグ)	2.9	17.0%	20.3%	31.3%	22.5%	8.8%
⑨プロバスケットリーグ (bjリーグ)	2.9	16.7%	18.2%	29.5%	25.8%	9.8%
⑨プロバスケットリーグ (bjリーグ)	2.6	18.0%	26.0%	36.0%	14.0%	6.0%
⑩実業団バスケットボール	2.7	20.3%	20.3%	36.3%	17.6%	5.5%
⑩実業団バスケットボール	2.7	22.0%	17.4%	34.8%	19.7%	6.1%
⑩実業団バスケットボール	2.6	16.0%	28.0%	40.0%	12.0%	4.0%
⑪東京五輪の招致活動	3.3	10.4%	6.6%	37.4%	35.2%	10.4%
⑪東京五輪の招致活動	3.2	11.4%	7.6%	39.4%	31.8%	9.8%
⑪東京五輪の招致活動	3.5	8.0%	4.0%	32.0%	44.0%	12.0%
	平均	挑戦勇氣	非凡さ	礼儀人間	不屈さ	憧れや夢
⑫選手のどんな点に感動		61.5%	53.3%	37.4%	35.7%	50.5%
⑫選手のどんな点に感動		59.8%	58.3%	33.3%	36.4%	50.0%
⑫選手のどんな点に感動		66.0%	40.0%	48.0%	34.0%	52.0%

	平均	重要	それほど	非重要		
⑬文武両道	1.6	42.3%	51.1%	6.6%		
⑬文武両道	1.6	43.9%	49.2%	6.8%		
⑬文武両道	1.7	38.0%	56.0%	6.0%		
	平均	知っている	知らない			
⑭Jチーム名	1.2	78.0%	22.0%			
⑭Jチーム名	1.2	80.3%	19.7%			
⑭Jチーム名	1.3	72.0%	28.0%			
	平均	40.1%	59.9%			
⑮選手名	1.6	40.1%	59.9%			
⑮選手名	1.6	42.4%	57.6%			
⑮選手名	1.7	34.0%	66.0%			
	平均	86.8%	13.2%			
⑯代表本田、香川以外	1.1	86.8%	13.2%			
⑯代表本田、香川以外	1.1	87.9%	12.1%			
⑯代表本田、香川以外	1.2	84.0%	16.0%			
	平均	12.1%	87.9%			
⑰日立サンロッカーズ	1.9	12.1%	87.9%			
⑰日立サンロッカーズ	1.9	9.8%	90.2%			
⑰日立サンロッカーズ	1.8	18.0%	82.0%			
	平均	経験あり	やりたい	知ってる	知らない	
⑱フットサル	2.1	40.1%	9.3%	48.9%	1.6%	
⑱フットサル	1.9	50.0%	10.6%	37.9%	1.5%	
⑱フットサル	2.7	14.0%	6.0%	78.0%	2.0%	
	平均	している	したいが	しない		
⑲スポーツ活動を?	1.9	41.8%	26.9%	31.3%		
⑲スポーツ活動を?	1.8	48.5%	24.2%	27.3%		
⑲スポーツ活動を?	2.2	24.0%	34.0%	42.0%		
	平均	体力が	機会が	時間が	場所が	費用が
⑳活動の障害になる点		30.6%	26.1%	31.3%	26.9%	24.6%
⑳活動の障害になる点		24.5%	27.6%	25.5%	28.6%	30.6%
⑳活動の障害になる点		47.2%	22.2%	47.2%	22.2%	8.3%
	平均	イエス	ノー			
㉑選手登録	1.6	43.0%	57.0%			
㉑選手登録	1.4	57.1%	42.9%			
㉑選手登録	2.0	4.3%	95.7%			
	平均	6.2				
㉒睡眠時間	6.2					
㉒睡眠時間	6.2					
㉒睡眠時間	6.0					
	平均	影響は大	プラスも	影響は少		
㉓睡眠不足の影響は?	2.0	44.5%	13.7%	41.8%		
㉓睡眠不足の影響は?	2.0	41.7%	12.1%	46.2%		
㉓睡眠不足の影響は?	1.8	52.0%	18.0%	30.0%		

この中で、特に大きな差が出たものを中心に分析・考察を試みた。

興味深かったのは、プロサッカーへの関心度で、Jリーグに特別な好印象（回答5）を持っているのが、若年層（平成生まれ）ではなく大人世代の方。「大好き」が26・0%対16・7%という結果になった（グラフ⑦参照）。

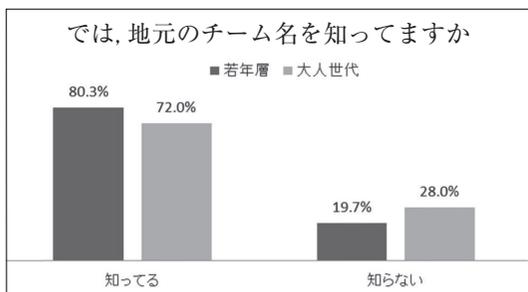
グラフ7 Jリーグ好感度 年齢層別



ところが、「では、地元のチーム名（柏レイソル）を知っていますか、教えてください」という質問に対しては、大人世代の28%が「言えません」だった。前述の通り、このアンケートは柏駅東口の、柏レイソルの大看板の真下で行ったもので、それでもレイソルの名前を知らない人が、道行く大人たちの3割近くもいるという現実を、サッカー関係者だけでなく、むしろ行政を含めた社会の側が重く受け止めるべきではないだろうか。

俗にサッカーブームと言われ、多く若年層「サッカー大好き」と答える世相ではあるが、それは単なる世相、すなわちマスコミも含めた世の中の流れであり、実際には地元のプロチームの名前すら、期待したほどには浸透していない。

グラフ8 チーム名知識年齢層別



アンケートで「サッカーは大好き」と答えるが、実際には何も知らない、観戦したこともない、そういう大人たち（大人世代）が存在するのである（グラフ8参照）。

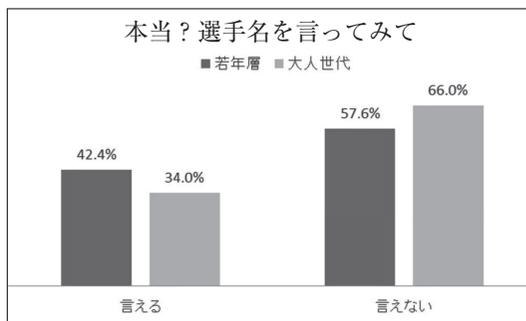
これは、「～がはやっているらしい」と聞けば、自分もそれに受動的にのってしまふ、主体性のあまりない大人たちが増えているという、日本社会の文化的教養的な問題をも、影絵のように映し出しているのではないか。

文科省では「今の大学教育ではだめだ。大学生にもっと主体性を植え付けるべきだ」と指針を示しているが、何のことはない、主体性がないのは、大人たちも同じであるという現実を、このデータは示している。今後さらなる調査研究の余地のある、興味深いテーマである。

追い打ちをかけるようなデータ結果がある。

2-1項でも述べたが、柏レイソルの選手名を一人でも言うてみてください、という設問に対し、若年層も半数以上、57・6%が「実は一人も知りません」という意外な結果となったが、大人層はさらに虚実が激しく、66・0%が、「知りません」だった（グラフ9参照）。

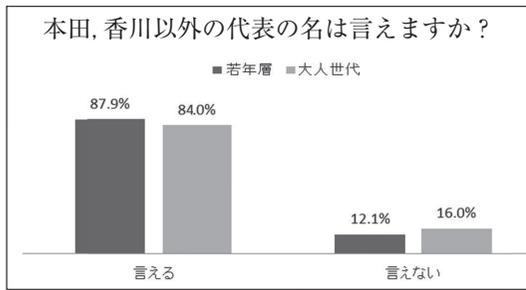
グラフ9 選手名知識 年齢層別



ちなみに、日本代表に関してはともに8割以上が「本田、香川以外の選手名も言える」という好成績を表し、これについては年齢層の差異はほとんどなかった（グラフ10参照）。

従って、「テレビの情報番組などで多く流されるスポーツについては好感度、関心度は高いが、だからといってその種目（例サッカー）そのものに深い愛着や関心があるとは限らず、積極的に知

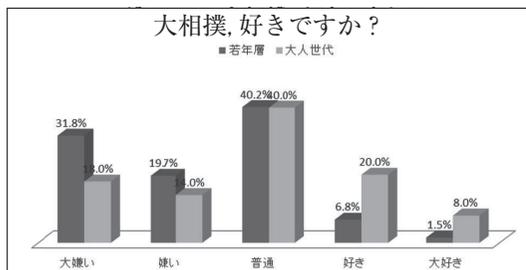
グラフ10 代表知識 年齢層別



識(選手名など)を得ようともいない」というカルチャー(風潮)が、ここでも確認され、大人世代によりその「受動的なスポーツファン」が多いことも確認できた。ただし、この現象自体に、スポーツの側から善し悪しの論評をするのは無意味である。たとえミーハー的な興味からでも、スポーツに関心を持ってもらうことは、マイナスとは限らない。

「どんなスポーツが好きか」については、どの項目も特筆すべき年齢層による差異はあまり目立たなかったが、大相撲で「積極的な意味合いで嫌

グラフ11 大相撲 年齢層別



い」という「5」を回答したのは平均では28%だったが、内訳は若年層が31・8%と非常に高い数値を示したのに対し、大人世代は18・0%だった(グラフ11参照)。

他のスポーツで「大嫌い」の回答はほとんどが10%以内の一桁回答だから、大相撲は予想以上に嫌われていることになる。

その理由についてのインタビュー結果の傾向は、2-2ですすでに述べた。若年層は「かっこよくない」などの他に「八百長をやっているらしい」を挙げるケースがインタビューでは目立った。一方、大人世代は「日本人がいない」がほとんどの理由だった。

平易な言い方をすれば、大人世代よりも若年層の方が倫理観や道徳観に敏感で、鋭く反応する、といった傾向がうかがえた。

ミーハー成人が増えている、といっっては世俗的すぎる表現になるが、実は東京五輪の招致活動に対する印象でも、大人世代は「マスコミによって、目の前に展開されている事象」に対して、若年層よりも「素直に反応」(迎合)しやすい傾向が表れている。(表3参照)。

ただし、

選手のどんな姿に感動するか、という設問は、第2章でも述べたように「スポーツの外面的な部分だけでなく、精神的な部分にも関心を持っているか」の間接的に調査を試みたものだが、ここでの「礼儀正しさや人格」については、さすがに大人世代の方が強くスポーツシーンに求めており、若年層の33・3%(複数回答)に対して、圧倒的な48%をマークしている。

表3 印象比較

①東京五輪の招致活動	平均	大嫌い(反対)		ふつう		大好き(賛成)
①若年層	3.2	11.4%	7.6%	39.4%	31.8%	9.8%
①大人世代	3.5	8.0%	4.0%	32.0%	44.0%	12.0%
	平均	挑戦勇気	非凡さ	礼儀人間	不屈さ	憧れや夢
②選手のどんな点に感動		61.5%	53.3%	37.4%	35.7%	50.5%
②若年層		59.8%	58.3%	33.3%	36.4%	50.0%
②大人世代		66.0%	40.0%	48.0%	34.0%	52.0%

3-2 文武両道に対する意識 男女の差異

この項ではまず、男女別のデータで大きな差があるか、それはどのような背景からかを分析、考察した。添付の集計表(表4)は、上段が男性、下段が女性の集計結果を示している。前述意識部

分では、目立った差異がほとんど見られなかった。

しかし、文武両道に対する考え方では、男性が「きわめて重要である」としたのに対し、女性は35%にとどまった。これは予測通りの差異だった(グラフ12参照)。

表4 集計年齢層別比較

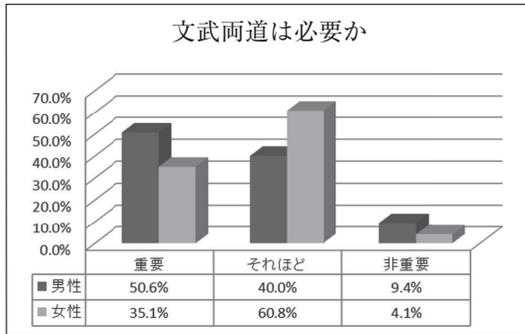
柏駅前市民スポーツ好感度調査
試算比較表 男女比較

上段 男子
下段 女子

	平均					
①年齢	27.0					
①年齢	25.5					
①年齢	28.4					
	平均	男性	女性			
②性別	1.5	46.7%	53.3%			
②性別 1)男性 2)女性	1.0	100.0%	0.0%			
②性別 1)男性 2)女性	2.0	0.0%	100.0%			
	平均	あり	なし			
③部活動の経験?	1.3	69.2%	30.8%			
③部活動の経験?	1.2	83.5%	16.5%			
③部活動の経験?	1.4	56.7%	43.3%			
	平均	嫌感	<-	普通	>-	好感
④サッカー	3.8	1.1%	4.9%	25.3%	49.5%	19.2%
④サッカー	3.8	1.2%	5.9%	24.7%	47.1%	21.2%
④サッカー	3.8	1.0%	4.1%	25.8%	51.5%	17.5%
⑤高校サッカー	3.4	6.0%	7.7%	35.2%	39.6%	11.5%
⑤高校サッカー	3.5	5.9%	3.5%	36.5%	38.8%	15.3%
⑤高校サッカー	3.3	6.2%	11.3%	34.0%	40.2%	8.2%
⑥プロ野球	3.4	7.1%	11.5%	33.0%	34.6%	13.7%
⑥プロ野球	3.6	4.7%	9.4%	27.1%	41.2%	17.6%
⑥プロ野球	3.2	9.3%	13.4%	38.1%	28.9%	10.3%
⑦高校野球	3.7	4.4%	9.3%	23.6%	36.8%	25.8%
⑦高校野球	3.6	4.7%	12.9%	23.5%	37.6%	21.2%
⑦高校野球	3.8	4.1%	6.2%	23.7%	36.1%	29.9%
⑧大相撲	2.4	28.0%	18.1%	40.1%	10.4%	3.3%
⑧大相撲	2.5	27.1%	14.1%	41.2%	12.9%	4.7%
⑧大相撲	2.3	28.9%	21.6%	39.2%	8.2%	2.1%
⑨プロバスケットリーグ (bjリーグ)	2.9	17.0%	20.3%	31.3%	22.5%	8.8%
⑨プロバスケットリーグ (bjリーグ)	2.9	16.5%	18.8%	32.9%	20.0%	11.8%
⑨プロバスケットリーグ (bjリーグ)	2.8	17.5%	21.6%	29.9%	24.7%	6.2%
⑩実業団バスケットボール	2.7	20.3%	20.3%	36.3%	17.6%	5.5%
⑩実業団バスケットボール	2.7	20.0%	21.2%	37.6%	15.3%	5.9%
⑩実業団バスケットボール	2.7	20.6%	19.6%	35.1%	19.6%	5.2%
⑪東京五輪の招致活動	3.3	10.4%	6.6%	37.4%	35.2%	10.4%
⑪東京五輪の招致活動	3.2	11.8%	9.4%	35.3%	37.6%	5.9%
⑪東京五輪の招致活動	3.4	9.3%	4.1%	39.2%	33.0%	14.4%
	平均	感動勇氣	非凡さ	礼儀人格	不屈さ	憧れや夢
⑫選手のどんな点に感動		61.5%	53.3%	37.4%	35.7%	50.5%
⑫選手のどんな点に感動		63.5%	60.0%	29.4%	28.2%	41.2%
⑫選手のどんな点に感動		59.8%	47.4%	44.3%	42.3%	58.8%

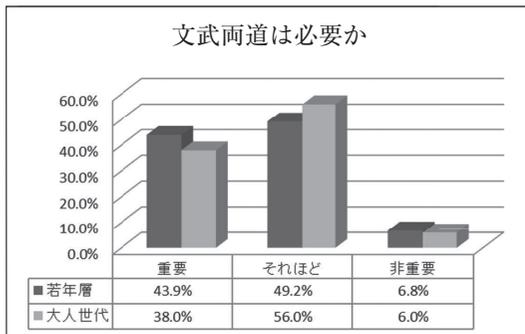
	平均	重要	それほど	非重要		
⑬文武両道	1.6	42.3%	51.1%	6.6%		
⑬文武両道	1.6	50.6%	40.0%	9.4%		
⑬文武両道	1.7	35.1%	60.8%	4.1%		
	平均	イエス	ノー			
⑭Jチーム名	1.2	78.0%	22.0%			
⑭Jチーム名	1.2	83.5%	16.5%			
⑭Jチーム名	1.3	73.2%	26.8%			
	平均					
⑮選手名	1.6	40.1%	59.9%			
⑮選手名	1.5	49.4%	50.6%			
⑮選手名	1.7	32.0%	68.0%			
⑯代表本田、香川以外	1.1	86.8%	13.2%			
⑯代表本田、香川以外	1.1	87.1%	12.9%			
⑯代表本田、香川以外	1.1	86.6%	13.4%			
⑰日立サンロッカーズ	1.9	12.1%	87.9%			
⑰日立サンロッカーズ	1.8	16.5%	83.5%			
⑰日立サンロッカーズ	1.9	8.2%	91.8%			
	平均	経験あり	やりたい	知っている	知らない	
⑱フットサル	2.1	40.1%	9.3%	48.9%	1.6%	
⑱フットサル	1.7	61.2%	11.8%	24.7%	2.4%	
⑱フットサル	2.5	21.6%	7.2%	70.1%	1.0%	
	平均	している	したいが	しない		
⑲スポーツ活動を?	1.9	41.8%	26.9%	31.3%		
⑲スポーツ活動を?	1.5	65.9%	18.8%	15.3%		
⑲スポーツ活動を?	2.2	20.6%	34.0%	45.4%		
	平均	体力が	機会が	時間が	場所が	費用が
⑳活動の障害になる点		30.6%	26.1%	31.3%	26.9%	24.6%
⑳活動の障害になる点		28.4%	23.9%	29.9%	28.4%	25.4%
⑳活動の障害になる点		32.8%	28.4%	32.8%	25.4%	23.9%
	平均	イエス	ノー			
㉑選手登録	1.6	43.0%	57.0%			
㉑選手登録	1.5	51.6%	48.4%			
㉑選手登録	1.8	20.8%	79.2%			
㉒睡眠時間	6.2					
㉒睡眠時間	6.4					
㉒睡眠時間	6.0					
	平均	影響は大	プラスも	影響は少		
㉔睡眠不足の影響は?	2.0	44.5%	13.7%	41.8%		
㉔睡眠不足の影響は?	1.9	43.5%	18.8%	37.6%		
㉔睡眠不足の影響は?	2.0	45.4%	9.3%	45.4%		

グラフ 12 文武両道男女別



ちなみにこの項目に関する他の分析を見てみると、グラフ 13 のように年齢層別では若年層の方が大人世代よりも文武両道の重要性を意識してお

グラフ 13 文武両道年齢層別



り (43・9%対 38・0%)、「最近の若い人は結構しっかりしているね」という、意外な結果となった。現代の学校生徒、学生の間では「スポーツばかりしていると将来、受験や就活で困ったことに

なるかも」という気持が、見かけよりも強いかもしれない。

この結果からも、3-1で提示した、日常的には「大人の方がミーハー的な感覚でスポーツを見ているような」現象が、浮き上がってきた。

改めて問われれば、スポーツに内面的な部分を強く求める回答が多くなるのだが。

3-3 部活動体験による差

(グラフ 14 文武両道部活経験別)

では部活動の経験、体験者と、そうでない人の回答差はあるのだろうか。

添付のグラフ 14 で示すとおり、体験・経験者の方が「文武両道は重要である」と考えていることが判明した。これは自然な結果でもある。

なおこのほか、高校野球に関する好感度調査で、年齢層による差異が若干見受けられた(表5参照)。若年層では「好き」という、いってみれば標準

グラフ 14 文武両道部活経験別

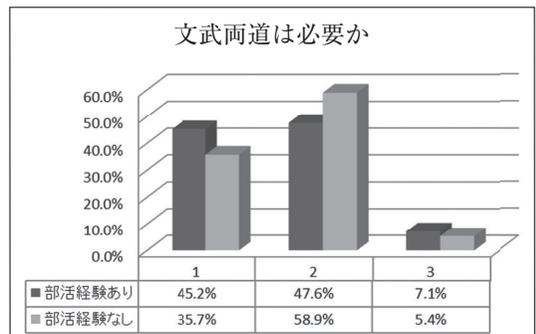


表 5 高校野球 部活経験別

⑦高校野球	平均	大嫌い	嫌い	ふつう	好き	大好き
⑦若年層	3.6	5.3%	10.6%	24.2%	37.9%	22.0%
⑦大人世代	4.0	2.0%	6.0%	22.0%	34.0%	36.0%

表 6 高校サッカー 部活経験別

⑤高校サッカー	平均	大嫌い	嫌い	ふつう	好き	大好き
⑤若年層	3.5	3.8%	9.8%	33.3%	41.7%	11.4%
⑤大人世代	3.3	12.0%	2.0%	40.0%	34.0%	12.0%

的な回答が最多の37・9%を占めたが、大人世代では「大好き」が36%と、最大値を示した。若年層の大好きは22%で、高校野球に関しては圧倒的に大人世代の熱い支持を受けていることが分かった。

一方の高校スポーツ代表であるサッカーでは若

年層は「好き」が41・7%、「大好き」が11・4%と高い好感度を示したが、大人世代は高校サッカーについては比較的冷静で、最大値は「ふつう」の40・0%だった(表6参照)。

参考のために、部活動の体験有無に関する比較表(表7)を添付する。

表7 集計部活経験有無別

柏駅前市民スポーツ好感度調査
試算比較表 部活経験有無
上段 若年層(平成生まれ)
下段 大人世代(大正、昭和)

	平均					
①年齢	27.0					
①年齢	25.7					
①年齢	30.1					
	平均	男性	女性			
②性別	1.5	46.7%	53.3%			
②性別 1)男性 2)女性	1.4	56.3%	43.7%			
②性別 1)男性 2)女性	1.8	25.0%	75.0%			
	平均	あり	なし			
③部活動の経験?	1.3	69.2%	30.8%			
③部活動の経験?	1.0	100.0%	0.0%			
③部活動の経験?	2.0	0.0%	100.0%			
	平均	嫌感	<-	普通	>-	好感
④サッカー	3.8	1.1%	4.9%	25.3%	49.5%	19.2%
④サッカー	3.7	1.6%	6.3%	27.0%	50.0%	15.1%
④サッカー	4.0	0.0%	1.8%	21.4%	48.2%	28.6%
⑤高校サッカー	3.4	6.0%	7.7%	35.2%	39.6%	11.5%
⑤高校サッカー	3.5	5.6%	6.3%	31.7%	43.7%	12.7%
⑤高校サッカー	3.2	7.1%	10.7%	42.9%	30.4%	8.9%
⑥プロ野球	3.4	7.1%	11.5%	33.0%	34.6%	13.7%
⑥プロ野球	3.5	4.8%	8.7%	34.1%	37.3%	15.1%
⑥プロ野球	3.1	12.5%	17.9%	30.4%	28.6%	10.7%
⑦高校野球	3.7	4.4%	9.3%	23.6%	36.8%	25.8%
⑦高校野球	3.7	4.8%	7.9%	24.6%	36.5%	26.2%
⑦高校野球	3.7	3.6%	12.5%	21.4%	37.5%	25.0%
⑧大相撲	2.4	28.0%	18.1%	40.1%	10.4%	3.3%
⑧大相撲	2.5	22.2%	22.2%	42.9%	9.5%	3.2%
⑧大相撲	2.3	41.1%	8.9%	33.9%	12.5%	3.6%
⑨プロバスケットリーグ(bjリーグ)	2.9	17.0%	20.3%	31.3%	22.5%	8.8%
⑨プロバスケットリーグ(bjリーグ)	2.9	15.1%	21.4%	30.2%	22.2%	11.1%
⑨プロバスケットリーグ(bjリーグ)	2.7	21.4%	17.9%	33.9%	23.2%	3.6%
⑩実業団バスケットボール	2.7	20.3%	20.3%	36.3%	17.6%	5.5%
⑩実業団バスケットボール	2.7	17.5%	23.8%	33.3%	19.0%	6.3%
⑩実業団バスケットボール	2.6	26.8%	12.5%	42.9%	14.3%	3.6%
⑪東京五輪の招致活動	3.3	10.4%	6.6%	37.4%	35.2%	10.4%
⑪東京五輪の招致活動	3.2	8.7%	7.9%	42.1%	32.5%	8.7%
⑪東京五輪の招致活動	3.4	14.3%	3.6%	26.8%	41.1%	14.3%
	平均	感動勇氣	非凡さ	礼儀人格	不屈さ	憧れや夢
⑫選手のどんな点に感動		61.5%	53.3%	37.4%	35.7%	50.5%
⑫選手のどんな点に感動		59.5%	50.0%	36.5%	36.5%	45.2%
⑫選手のどんな点に感動		66.1%	60.7%	39.3%	33.9%	62.5%

	平均	重要	それほど	非重要		
⑬文武両道	1.6	42.3%	51.1%	6.6%		
⑬文武両道	1.6	45.2%	47.6%	7.1%		
⑬文武両道	1.7	35.7%	58.9%	5.4%		
	平均	イエス	ノー			
⑭Jチーム名	1.2	78.0%	22.0%			
⑭Jチーム名	1.2	77.8%	22.2%			
⑭Jチーム名	1.2	78.6%	21.4%			
	平均	あり	なし			
⑮選手名	1.6	40.1%	59.9%			
⑮選手名	1.5	45.2%	54.8%			
⑮選手名	1.7	28.6%	71.4%			
	平均	経験あり	やりたい	知っている	知らない	
⑯代表本田、香川以外	1.1	86.8%	13.2%			
⑯代表本田、香川以外	1.1	85.7%	14.3%			
⑯代表本田、香川以外	1.1	89.3%	10.7%			
⑰日立サンロッカーズ	1.9	12.1%	87.9%			
⑰日立サンロッカーズ	1.8	15.9%	84.1%			
⑰日立サンロッカーズ	2.0	3.6%	96.4%			
	平均	している	したいが	しない		
⑱フットサル	2.1	40.1%	9.3%	48.9%	1.6%	
⑱フットサル	2.0	46.8%	11.9%	40.5%	0.8%	
⑱フットサル	2.5	25.0%	3.6%	67.9%	3.6%	
	平均	している	したいが	しない		
⑲スポーツ活動を?	1.9	41.8%	26.9%	31.3%		
⑲スポーツ活動を?	1.7	55.6%	22.2%	22.2%		
⑲スポーツ活動を?	2.4	10.7%	37.5%	51.8%		
	平均	力が	機会が	時間が	場所が	費用が
⑳活動の障害になる点		30.6%	26.1%	31.3%	26.9%	24.6%
⑳活動の障害になる点		26.8%	20.6%	37.1%	24.7%	22.7%
⑳活動の障害になる点		40.5%	40.5%	16.2%	32.4%	29.7%
	平均	イエス	ノー			
㉑選手登録	1.6	43.0%	57.0%			
㉑選手登録	1.5	50.7%	49.3%			
㉑選手登録	2.0	0.0%	100.0%			
	平均	影響は大	プラスも	影響は少		
㉒睡眠不足の影響は?	2.0	44.5%	13.7%	41.8%		
㉒睡眠不足の影響は?	2.0	42.1%	14.3%	43.7%		
㉒睡眠不足の影響は?	1.9	50.0%	12.5%	37.5%		

表8 好感度マイナースポーツ 左が大嫌いの1, 右が大好き5

④サッカー	1.1%	4.9%	25.3%	49.5%	19.2%
⑤高校サッカー	6.0%	7.7%	35.2%	39.6%	11.5%
⑥プロ野球	7.1%	11.5%	33.0%	34.6%	13.7%
⑦高校野球	4.4%	9.3%	23.6%	36.8%	25.8%
⑧大相撲	28.0%	18.1%	40.1%	10.4%	3.3%
⑨プロバスケットリーグ (bjリーグ)	17.0%	20.3%	31.3%	22.5%	8.8%
⑩実業団バスケットボール	20.3%	20.3%	36.3%	17.6%	5.5%

3-4 マイナースポーツに関する理解

ここまでで触れてこなかった質問項目に、マイナースポーツに関する調査がある。

バスケットボールをマイナースポーツと分類するには抵抗があるが、たとえば種目別に「好きか、嫌いか」(好感を持つかどうか)という設問に対し、サッカーや野球と比べるとバスケットボールは相当に分が悪いと言わねばならない(表8)。

上表が、設問④～⑩に於ける他の種目との比較だが、すでに述べたように大相撲の不人気は別格として、プロのbjリーグであれ、実業団であれ、バスケットボールは「ふつう」がともに最大値で、どちらかと言えば「嫌い」に振れている。

平均値は実業団が2.7(大嫌いが1, 大好きが5)プロが2.9。大相撲の2.4よりは良いが、「大嫌い」が相当の値を示している。

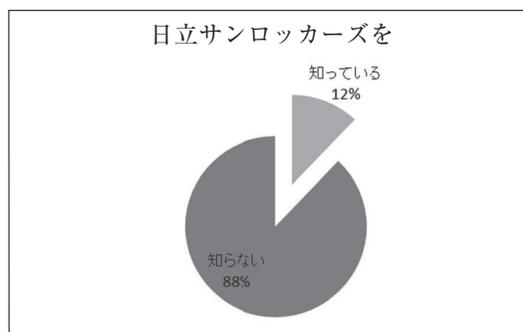
しかし、個別インタビューでは、「嫌いというより、関心がなく、サッカーや野球を先に聞かれているので、それに対して、ほとんど興味がないという意味で、1に○をつけた」といった説明が、相当数あった。

すなわち、嫌いと言うよりも見て愉しむスポーツとしては「知らない、興味が全くない」、あるいは「見ても面白くない」という意味での低評価だった。

これは設問⑰で「地元の実業団の強豪チーム日立サンロッカーズを知っていますか」という問いに対し、地元ではあるが「知らない」が88%に達していることを相互に裏付けるものだ(グラフ15参照)。

プロではない以上、知名度が最優先ではないが、バスケットボール界の最高峰の位置にある。自ら

グラフ15 サンロッカーズ



の強化だけでなく、競技の普及の責任をも担うクラブである以上、柏駅を通過する人の12%しかチームの存在を知らないという現実、今後の活動の改善目標となるのではないだろうか。

ステークホルダーを「観戦に来るファン」とのみ捉えてしまうと、サッカーの柏レイソル同様、「知っているけど、実際は何も知らない」という空洞化現象に陥る可能性は大きい。

この課題は、二次分析による「部活動の経験の有無」による差異を調べた結果にも示されている。表9が、そのデータだ。

比べてみると、ともに「部活動経験者」がより高い好感度を示し、逆に経験なしのグループは、辛い点をつけている。特に「経験なし」は、実業団に対して3割近い人が「大嫌い」(知らない、見ても面白くない)をマークした。前述の通り、「嫌悪を感じる」が回答の真意ではなく、多分にサッカー野球と比べると、興味が薄いという気持ち在实际だったもようだが、部活動の経験がない、

表9 バスケットボール比較

⑨プロバスケットリーグ（bjリーグ）	平均値	大嫌い	嫌い	ふつう	好き	大好き
部活動経験あり（現役を含む）	2.9	15.1%	21.4%	30.2%	22.2%	11.1%
経験なし	2.7	21.4%	17.9%	33.9%	23.2%	3.6%
⑩実業団バスケットボール						
部活動経験あり（現役を含む）	2.7	17.5%	23.8%	33.3%	19.0%	6.3%
経験なし	2.6	26.8%	12.5%	42.9%	14.3%	3.6%

すなわちスポーツをよく知らないグループは、テレビでも減多に報じられず、中継もほとんどない種目は、「観るスポーツ」としての存在を無視しているといっている。

「別に、これでもいいのだ、わいわいと騒いでもらいたくてバスケやっているわけじゃない」が本音であり、むしろ実業団バスケットボールの誇りでもあるかもしれないし、またそれを好ましく感じる向きも多いのだろうが、日本の最高レベルのチームとしての責任が、これで果たされているとは考えにくい。

第4章 スポーツ活動の課題 集計結果 ～その2 活動～

アンケート調査の前半は主として「スポーツをどのように感じているか」、言い換えれば「観る側」としての日常的な印象を探ったものだ。では、自分たち自身のスポーツ活動はどのような傾向にあるのか。

市民レベルの調査は、たとえば2000年に早稲田大学人間科学部が、埼玉県所沢市で住民500人を対象にスポーツ社会学の側から実態調査を行っている。これは本学非常勤講師遠藤大哉（当時同大学院助手）らが直接行ったものだが、「インタビューによる大規模な調査だったが、家庭訪問を主とした調査だった。従って、日常外に出て働いている人よりも家庭内にいる人からの目線での回答が多く、それなりに偏りもあった」（遠藤）。本ゼミでは逆に、町に出て、該当での調査を行った。これもそれなりの偏りはあるには違いないが、「町に行く人のスポーツ活動の実際」というウインド

ウからは、かなり実数に近い部分が照射されたと考える。

目的は、その実数を捉えることで、日本のスポーツがこれから何をすべきか、特に東京五輪の大きなうねりの中で、何を土台にすべきか、あるいは何を忘れてはならないかを探求することだった。

この章では、実活動に関する調査結果の年齢による差や、男女の差など、2次的に分析した結果を合わせて考察して述べる。

4-1 活動率

率直に、「あなたは現在、何かのスポーツをしていますか？」という設問が問い⑩だ。

（注＝尋ねられた場合は、「役員やボランティア・スタッフも含まれるのですか」に「イエス」と答えることとしたが、本来これは「ノー」で、自分自身が体を動かしているかどうかを知りたかった。次の機会にはここを調整する）。

予想では、町をゆく人の25%程度が「している」と答えるだろうと思われたが、調査対象の結果的な平均年齢が29歳と比較的若く、高校生も含まれていたため、「したいけれどしていない」が27

グラフ16 スポーツ活動

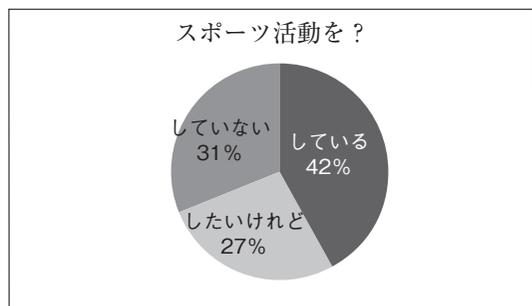


表 11 スポーツ活動年齢層別

	平均	している	したいが	しない
⑩スポーツ活動を？（平均）	1.9	41.8%	26.9%	31.3%
⑩若年層（平成生まれ）	1.8	48.5%	24.2%	27.3%
⑩大人世代（より高齢）	2.2	24.0%	34.0%	42.0%

%。「している」が42%と、予想よりも「町を実際に歩いている人たちのスポーツ志向」はかなり高いものとなったグラフ 16 参照)。

したくない、は31%にとどまった。

では、年齢的にはどのような差があるのだろうか。

この「年代別」2つのグループではやはりかなりはっきりした差が出ており、先に述べた全体の数値はむしろ参考にとどまることになるだろう。

表 11 でも確認できるように、若年層の半数近くが部活などでのスポーツに参加しているが、それよりも大人世代の場合、実際に活動しているのは24%にとどまった。

また後に述べるが、「したいが、していない」人たちが大人世代34%も存在することが、日本のスポーツの最大の問題点であり、東京五輪に向けての根源的な課題となると思われる。

さらに全体に対する男女比では、別表のように、男性の65%がすでに今現在スポーツ活動を行っているという回答しているが、女性は全体の2割しか行っていない（表 12 参照）。

問題は、女性のうち、なんと34%「スポーツをしたいが、今はしていない」と答えていることだ。これは「一般市民がスポーツをしたいのに、

表 12 スポーツ活動男女別

	平均	している	したいが	しない
男性	1.5	65.9%	18.8%	15.3%
女性	2.2	20.6%	34.0%	45.4%

社会やスポーツ界の側がそのチャンスを十分には提供していない」ことにつながる。いわゆるスポーツ行政にとって、決定的な立ち後れがこのデータに表れているのではないだろうか。

これに関してさらに次項でその背景を分析する。

4-2 「したいが、していない」背景

設問⑩は、「スポーツをしたいと思うが、今はしていない」人たちに、その理由を尋ねたものだ。設問を改めて掲載する・

⑩上記 1) 2) の、している方、したい方への共通質問です。現在の悩み、問題点は？
いくつでも○を

- a) 気持はあるが、体力、気力に自信がない、年齢的にきつい
- b) 参加の機会がすくない、参加の仕方がよくわからない
- c) 仕事や家事でその時間がきつい、取りにくい
- d) 場所や施設がない、少ない
- e) 費用がかかる

これに対する回答は、表 13 の通りだった。

全体の3割前後が「やりたいが、そこまで体力気力。時間がないよ」という“実感”を表明している。男女による差は、ここではあまり見られないが、「だからやらない」をそのまま「本人の意思だから」で放置してよいのだろうか。やってみよう、という意思を持っている人たちをスポーツ界がなんとか吸い込む努力を十分しているだろうか。

表 13 活動の障害

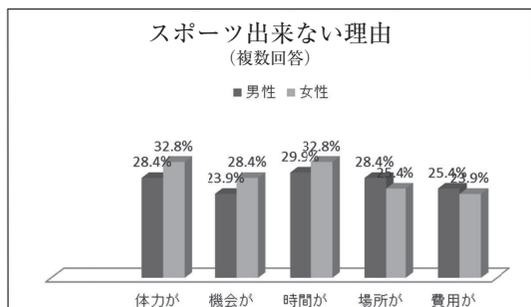
	平均	体力が	機会が	時間が	場所が	費用が
⑩活動の障害になる点		30.6%	26.1%	31.3%	26.9%	24.6%

ある回答者（男性、大人、45歳）は「強気に、やりましょう、あんたでもできる、とか、もっとへばもやってるんだから」などと誰かに後押しされたら、きっとやるが、そういうこともないままにここに来た。第一、どこへ行けば、自分がやりたいと思っているスポーツ（バスケットボール）を再開できるのか、よくわからない。悪意はないのだろうが、市民スポーツ界は結構敷居が高い。自分たちですでに築き上げた世界での、目に見えない上下関係などを崩したくない、新たな英雄に登場して欲しいとは思わない、などの思惑も、リーダー格の中にはあるかもしれない。いずれにしても、行政の側がもう一歩踏み込んで、背中を押してくれたら。

といった実感を述べていた。

本設問は複数回答で、「どこへ行けばいいのかわからない」（機会）「サッカーをやりたくても場所がない」（場所）「お金がかかるのでできない」（費用）なども、それぞれの理由として表明されたが、インタビューの結果を含めて全体をまとめてみると、前述の男性のように、「実際の市民の目線にたったスポーツ推進行政」が、なされてはいるが、決して十分ではないことが分かる。

グラフ 17 スポーツ出来ない理由 男女別



このデータでは、男女にはあまり差異がなかった。しかし女性の回答では「時間がない」という項目が、「体力に自信がない」と並んで最多を占めており、社会全体の仕組みの中で、女性に自由な活動のチャンスが十分には与えられていない現実が浮き彫りにされている。五輪のメダル獲得数など、マスコミで報じられるようなピラミッドの

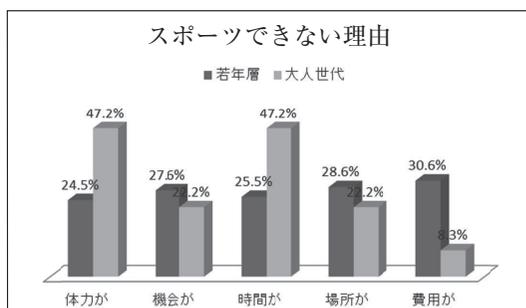
頂点部分では「女性の活躍」が目立ち、事実メダル数では男子を上回っているが、内閣府の平成24年男女共同参画局の調査では「民間企業の課長以上の男女の比率」は7%にも達していない。世界経済フォーラム（WEF）が2013年に発表した「世界男女格差報告」では、日本は対象136カ国中105位で、2006年の調査開始以来、最も悪いランキングとなった。世界の中では、後退しているのである。

アメリカの調査・コンサルティング会社「GMIレーティングス（GMI Ratings）」が4月に発狂した世界各国の企業における女性役員（取締役・執行役員）比率では、日本は1.1%で45カ国の44位だった。海外では企業役員の男女比率を最低でも男子100%に対して除し25%というガイドライン（クオーター制）を導入するところが少なくないが、日本は女性の社会進出後進国である。

女性のスポーツ活動も同様で、町を走るスカート姿の女性たちを見ると「むしろ女性の方がスポーツに積極的」との印象もあるが、実際にデータを取ってみると、前述のように「実際には、やりたいけどやれない」女性が3割以上を占めている（4-1項）。

スポーツでも土台部分での女性の「実活動」が、まだまだ未成熟といわねばならない。

グラフ 18 できない理由



では年齢層ではどうだ。ろうか（グラフ17参照）。「いまいち、体力的に」と答える人（複数回答）は、大人グループの半数近く。また同グループでは「時間がない」が同じく47.2%に達している。一方若年層は「お金がかかって」が最も多く、

表は文部科学白書 > 平成 22 年度文部科学白書 > 特集 1 スポーツ立国の実現から

スポーツをしない理由		(%)
1	仕事（家事：育児）がいそがしく手時間がないから	45.9
2	体が弱いから	24
3	年を取ったから	19.8
4	運動やスポーツが好きではないから	11.2
5	仲間がないから	7.7
6	金がかかるから	5.9
7	場所や施設がないから	5.4

(内閣府「体力・スポーツに関する世論調査 平成 21 年 9 月)

30%台に達していた。

こうしたデータから、「本当はしたいが」という気持ちを抱えながら、個々の日常生活の中でなかなか「スポーツをする」に踏み出していけない市民（大人）が、今日の前の町を歩いているという現実を把握することができる。

では、東京五輪は、こうした現実を改善できるのか、あるいは単に国際的な行事として五輪を開催し、実際の「地元のスポーツ活動」には、本腰を入れてその奨励に踏み出す気がないのか、あるいはまた、すでにスポーツをしている人、スポーツを見る人を満足はさせるが、「予備軍」には目を向けないのか。

以上のようなスポーツと社会の課題が判明してきた。

なお、同様の「したいのにできない理由」に関する内閣府の世論調査が、表のように文科省から公表されている。

第 5 章 考察：見えてきた課題 スポーツとは何か

スポーツをしている、と答えた人に、「たとえば陸連などに正式に選手登録していますか」という質問をすると、若年層は半数以上が「している」と答えたが、大人世代ではわずかに 4.3%しか「イエス」がなかった（表 14 参照）。

そうした大人世代への個別インタビューでは、
*たとえばテニスをするにしても「テニスク

ール」が主体で地区大会などは敬遠。

- *ジムに熱心に通っているが、だからといって何かのスポーツ競技をするわけではない。
- *ゴルフをするが現実には練習場通いが中心で、パブリック選手権などには出場しない。
- *ジョギングをするし市民マラソン大会にも出るが、陸連登録はしていない。必要ない。
- *自転車レースの市民の部で上位に入るが、登録選手の部では不利なので登録しない。

表 14 選手登録年代層別

	平均	イエス	ノー
②選手登録	1.6	43.0%	57.0%
②若年層	1.4	57.1%	42.9%
②大人世代	2.0	4.3%	95.7%

(注=若年世代では、学校の部活で、学校単位で選手登録をしているが、本人はそのことを知らないで、選手登録をしていない、と回答した例がかなりあるかもしれない)

といった各人の事情や思惑があるからだ。

では、それでいいのだろうか。

ここで、スポーツとは何なのか、という大きくて深く、絶対に「これだけが正解」という答えのない世界に対峙せざるを得なくなってくる。

スポーツの定義

- ①ルールがある
- ②競争がある
- ③結果がある

本学後藤ゼミ、遠藤大哉講師の講義では、上記のような基本条件が、世界共通の認識であること

を確認している。これはスポーツや五輪、その歴史に関するスポーツ評論に数多くの著書を残し、その指針を示した故川本信生氏の考えを踏襲したものである。むろん、競技会などをめざすための練習の行為事態は、これに当てはまらないが、その活動が上記の「スポーツ」を目指すための行為であれば、むろん総じてそれはスポーツ活動である。

これに相当しない行為として、登山や、冒険的で個人的な限界長距離走などがよく挙げられるが、それらは「共通ルール」はないが、自分でそれを設定し、自分や、これまでの他の記録、あるいは内容との競争であり、また自ずと結果がもたらされ、それは必要に応じて公表される点で、上記の「スポーツの定義」に少しも逆らわないと見なすべきだろう。また「怪我なしで、人に迷惑をかけずに生還する」という基本ルールが自ずと付いている。

ただし、「健康維持、増進のためのスポーツ」「体力作りのための活動」といった、上記の範疇には入りきれないエリアが、社会の中でも大きなウエートを占めてきた。「フィットネス」と言われる空間だ。

フィットネスの概念は、すでに述べたスポーツのための基礎的な体力作りに派生するもので、野球やフットボールのチームでは、これを受け持つ指導者を「フィットネスコーチ」と呼んでいる。日本の場合、科学的な基礎体力作りがスポーツの土台という概念が以前は明確ではなく、海外試合などを通して「技術ではなく、基礎体力で負けている」場面がしばしば見受けられた。激しい汗を流して走る、筋力強化をする「オフトレ」は、経験的に考案されたトレーニングが基盤で、マシンや計測装置を使用して「こうするからここが強くなる」といった根拠に基づいたものではなかった。

これに対して1970年代、米国プロフットボールなどの強化練習法が次第に明らかになり、「科学的なトレーニング」という概念が日本のスポーツ界に流れ込んできた。

時を前後して、米国ではケネス・クーパーが軍

人の心肺機能向上のための「エアロビクス・プログラム」の概念を発表。ここから、「選手ではない人たちのフィットネス」という新しい概念が米国では一気に広まっていった。

日本ではプロフットボール雑誌の編集長だった比佐仁氏が「フィットネス・アポロ」社を設立。1981年にはエアロビクスダンスの教室を開き、さらにカイザーカム2、エリエール動作分析システムなどを矢継ぎ早に日本に導入した。まずスポーツのトップ領域にこうしたシステムや概念が浸透し始めたが、ほぼ同時にスポーツジムなどで汗をかくこと、つまりフィットネス活動そのものが立派なスポーツであるとの市民権を獲得するようになってきた。

つまり、本来はスポーツのための競う強化部分、土台部分であったフィットネスが、独立して動き出し、「健康の維持や体力作りのために」特にスポーツをしなくても、町を走ったりジムでマシン相手に汗をかくこと自体がスポーツとして、社会から認められる時代になった。

スポーツという世界が拡大されたことは事実である。

スポーツジムには「スポーツのための基礎体力作り」「体力体調の調整」を目的とする人たちと、「スポーツのためではなく、日常的な健康体力のために」汗をかきに来る人とが混在し、次第に後者の方が数を増し始めている。

ここで問題になるのが、「スポーツ」という枠組みの変化と誤解だ。

フィットネスに代表される「健康増進や体力作りのためのスポーツ」が新たにスポーツの世界に入り込み、認められ、社会に受け入れられたため、しばしば「スポーツ（競技）をするのは、特別な人たちで、我々は単にいい汗をかきたいだけなのだ」という言葉の使い方が、特に行政の「生涯教育」などで使われる。行政側では町のスポーツ活動の主体を「競技をする特別な人たちとは別の、もっと緩やかな、愉しみ優先の世界」を対象に考えることが多くなってしまった。

しかし、こうした「競技は特殊」という切り離

しは、日本の市民スポーツ文化最大の難点ではないだろうか。

「自由に愉しむ、いい汗をかく」「健康のためにフィットネスをする」行為は、前述の「スポーツの定義」にあてはまらない部分が多い。フィットネスは、それを行うことによって健康や体力維持などのプラスの要素を獲得使用とするのが特徴だ。マイナス面は、初めから除外されている。

しかし古来、前述の本論で述べるスポーツとは、別の角度から検証すれば「何かの代償を払って自らの意思で行うもの」であり、好きなときに好きなように自分の体力や能力を発揮すれば良いものというものではない。

そうした能力がふんだんにあっても、やっぱり「ルール」という枠組みの中に自分を押し込め、そのルールによってしか、自分のすべてを発揮することが許されない。その「不自由さ」こそ、まずスポーツの特質である。また、「人と争うのはいやだ」「負けるのはいやだ」は、多くの人にとって共通することではあるが、それを乗り越えて実際に競争することが、「より速く」「より高く」「より強く」の原点であり、競争をしないで好きなところや好きなことはやるが、人や自分の限界とは争わない、のはスポーツではない。それでは進化はなく、スポーツの意味がない。結果に於いても同じである。

その代わり、その、ある意味で窮屈な代償を払ったあげくに獲得する生の歓喜は、何ものにも代えがたい。ルールへの挑戦、競争によるより激しい挑戦、こうした課程を乗り越えることがスポーツであり、それによって、究極的には「争い」の感情は昇華すらされてしまう。

スポーツが他の活動と異なるのは、こうした代償と、そこで得るものの特異性である。

にも関わらず、行政などではしばしば、スポーツをやる人たちをかえって「ギンギンに競技をやる特別な人たち」と位置づけて、隅に押しやるような政策をとったり、「我々とは違う、特殊な領域」として、体育協会に属するようなスポーツ組織や

その参加者（いわゆる選手、登録者）への支援や、参加促進には消極的になる傾向が見られる。

これでは、スポーツによる真の価値が社会から次第に忘れられていくことになりかねない。五輪やW杯の興業に応じてマスコミがそれらのスポーツを扱うが、社会の側はそれらを見るスポーツとして限定し、自分たちとのつながりを希薄にしていく傾向もある。

内閣府の「体力・スポーツに関する世論調査」に基づく文部科学省推計（成人の週1回以上スポーツ実施率の推移）では、「スポーツ振興基本計画として、できる限り早期に、成人の週1回以上のスポーツ実施率が2人に1人（約50パーセント）になることを目指す。また成人のスポーツ実施率（週1回以上）は緩やかであるが上昇傾向にある。平成16年38.5%→平成18年44.4%→平成21年45.3%）」などと示されている。

ただし、「この中には特に高齢者層に於いて、「体操、ウォーキング」などが多く含まれている」と注釈もつけられている。

この調査の土台となっている「スポーツとは何か」の概念が、前述の「登録選手のような人は、特別な人」「きつい練習や競争をしない、緩いスポーツこそ市民スポーツの本流」といった流れを生み、それが地方自治体の地域スポーツ行政の基本概念となっている傾向が見受けられる。

比佐氏によると、英国政府は「フィットネスのガイドライン」として、「激しい運動なら週75分以上、持続的な運動なら週2時間半以上」を示している。

たとえ競技ではないフィットネスに於いても、海外ではかなりハードな取り組みと内容を求めている。日本では「緩やかな」を旨として、統計上の「スポーツをしています」者の増加がスポーツ推進政策の主目的となっている印象は否めない。

真実に「スポーツ振興」を行政するならば、スポーツを特殊世界に追いやるのではなく、フィットネスとの融合、あるいはフィットネスを行う者

表は文部科学白書 > 平成 22 年度文部科学白書 > 特集 1 スポーツ立国の実現から

	日本	フランス	イギリス	韓国	豪州
予算額(億円)	58	263	249	130	49
年度	2008	2008	2007	2008	2008
対 GDP (%)	0.0036	0.0126	0.0112	0.0102	0.0061
対日本比	1	3.46	3.07	2.8	1.67

を出来るだけスポーツに導いていくことこそが、肝要ではないだろうか。それは本調査での「選手登録していますか」という設問への回答となって表れる部分を、改善することではないだろうか。

本項の冒頭で示した、大人世代の選手登録率が「スポーツをしている人」の5%にも満たない現実が日本の「町のスポーツ活動」の実像であることは、行政やスポーツ界の大きな課題といえる。スポーツ先進国といえる欧米諸国の活動内容と、日本の調査結果上の「市民スポーツの実態」内容を吟味する時期に来ていると言える。図は、文科省の「スポーツ基本法」の説明文書内にあるデータだが、日本のスポーツ行政が、予算面でも実際にはひどく後れており、五輪などで一部の選手が華々しく活躍している状況と、その土台である一般市民のスポーツ活動の現実を比べると、大きな違和感があることが否めない。(文科省図表国別スポーツ予算参照)。

一人でも多くの人が、陸連や自転車連盟の選手として登録し、アスリートとしての(今よりもワンランク上の)喜びや苦しみを体験し、それによって社会全体がスポーツへの理解度を深め、スポーツの側もそれに呼応していくことを、真摯に目指すべきテーマではないだろうか。

なお、選手登録は「上手下手」などは無関係で、また年会費も3000円程度が普通だが、ライフセービングなどの場合は登録が年1万円、別個にクラブへの登録に5000円と、敷居が高い場合もある。またマラソンやトレランなどの場合は陸連登録の必要はない。登録しない方がクラス分けでも

有利な時がある、などの理由から、登録をいやがる人は少なくない。また、「古い人」や「おじさん」「おじいさん」が威張り、独特の人間関係を創り上げて敷居を高くしている有様もしばしば見受けられる。こうしたバリアや誤解を解き、本来のスポーツへと誘い込んでいくための、真剣な対応を取ろうとしない競技団体も、地区には多い。

スポーツの入り口は、もっと広い、いや、入り口そのものが実はないはずである。

男女別でこの点を分析した結果は表15の通りで、やはり女性の側に「選手登録までは」と二の足を踏む、あるいはジム通いなどにとどまって、美容健康から一歩踏み出したスポーツ(競技)参加を敬遠している傾向が見られる。

表 15 選手登録男女別

	平均	イエス	ノー
②選手登録	1.6	43.0%	57.0%
②男性	1.5	51.6%	48.4%
②女性	1.8	20.8%	79.2%

また、スポーツ科学の普及に努めているこの分野の第一人者の一人、比佐仁さん(スポーツプログラムス主宰)は、本調査結果への論評を求めたところ、以下のように答えている。

比佐仁氏 国によってとらえ方が異なるのは事実だが、欧米、特にスポーツ先進国のドイツなどでは、何かのスポーツをするということは、レベルや年齢性別にかかわらず、日本で言うその競技のアスリートとなることであり、大会に参加し、競争し、より速く、高く、強くなることを目指す

ことで、真似ごっこだけで自分はスポーツをしているという意識を持つことは、非常に少ない。

競技団体は特殊な世界ではなく、スポーツの一番初めの支援者という構造になっており、日本はスポーツ競技をエリート化しすぎているのかもしれない。

フィットネス者をスポーツ者へと誘導する努力なくしては、本当の意味でスポーツ立国は成り立たないだろう。

まとめ

実際に“地元”柏市の駅前に立って、町を行く人たちに個別に質問して、「市民のスポーツ感覚、その活動実態」の基礎的な調査を行うことだった。

全体を単純集計するだけでなく、年齢層別（平成生まれ、それより年配）や男女、あるいは「部活動の経験があるか、ないか」などのグループ分け集計によって、町の実像をつかもうと試みたものだ。

はじめに、で述べたように、この等身大調査では、以下のような具体的な質問項目が検討された。

- 1) 各種のプロチームが“地元密着”をアピールしているが、実際の市民の側は？
- 2) スポーツの種目によって、その好感度はどのように異なるのか？
- 3) スポーツのどのような部分に惹かれているか？
- 4) 文武両道という言葉に代表される「選手の人格面」には果たして関心があるのか？
- 5) マイナススポーツにはどのような関心があるのか？
- 6) ごくふつうの一般市民のどのぐらいが、現実にスポーツをしているのか？
- 7) 「したいけどできない人」にとっての問題点は何か？

結果的に、興味深いデータが得られた。

たとえば

*サッカーは好感度が高かった。

*ところが、地元柏レイソルの大看板の下で調査したにもかかわらず、レイソルの名前を言えない人が2割以上いた。

*地元柏レイソルの選手を一人も知らない人が6割近かった。

*一方日本代表なら3人以上の名前をしている人が9割近かった。

*Jリーグ側は「地元密着」をうたい文句にしているが、現状は地元未着であるなどである。

こうした現実には、なんとなく推測はされながらも、ネガティブな結論の出る研究はこれまで比較的回避され、Jリーグや、スポーツ行政を肯定するような調査が多かった。しかし“地元”の現実を、等身大で知ることの重要性を調査に当たったゼミ生全員が強く感じることができた。また、このデータと結果を、チームやスポーツ行政が真摯に受け止め、「うたい文句」と現実の差を認識することが、ひいては知育スポーツの発展に対して現実的に寄与することになると考える。

また「大相撲の不人気」（28%が「大嫌い」）の背景にある不祥事・不透明のイメージ、スポーツに求められる倫理や「文武両道」の意識についても、同じである。

興味深かったのは、しばしば、若年層よりもそれ以上の大人世代の方が、スポーツを外面的、ブーム・現象的に捉え、悪くいえばミーハー的、よく言えば素直に受け止め、愛していることである。若年層の方が、実際にスポーツ活動を行っている人が多いこともあり、スポーツに内面的な部分を強く求める傾向が見られた。

また、市民のスポーツ活動調査においては、「スポーツをしたいが、していない」との回答が全体の3割近くを占めており、特に女性の場合は家事などで時間が取れない、参加の仕方が分からないといった理由が目立っていた。「したい人」たちに対し、スポーツの側（行政、組織）がもっと熱く「参加しましょう」と手をさし延べることで、町のスポーツの光景は大きく変わっていくはずである。

表16 集計人口分布修正

総合集計修正		個数	平均	最大	最少	a(1)	%	b(2)	%	c(3)	%	d(4)	%	e(5)	%
上段が換算集計	18,564														
下段が単純集計															
上:換算 下:単純		個数	平均	最大	最少	a(1)	%	b(2)	%	c(3)	%	d(4)	%	e(5)	%
①年齢		1060	46.5	85	25										
①年齢		182	27.0	85	15										
上:換算 下:単純		個数	平均	最大	最少	a(1)	%	b(2)	%	c(3)	%	d(4)	%	e(5)	%
②性別1)男性2)女性	1, 2	1060	1.6			419	39.5%	641	60.5%						
②性別1)男性2)女性	1, 2	182	1.5	2	1	85	46.7%	97	53.3%						
上:換算 下:単純		個数	平均	最大	最少	a(1)	%	b(2)	%	c(3)	%	d(4)	%	e(5)	%
③部活動の経験?	1, 2	1060	1.4			688	64.9%	372	35.1%						
③部活動の経験?	1, 2	182	1.3	2	1	126	69.2%	56	30.8%						
上:換算 下:単純		個数	平均	最大	最少	a(1)	%	b(2)	%	c(3)	%	d(4)	%	e(5)	%
④サッカー	5~1の数値	1060	3.9			20	1.8%	62	5.8%	222	20.9%	494	46.6%	241	22.8%
④サッカー	5~1の数値	182	3.8	5	1	2	1.1%	9	4.9%	46	25.3%	90	49.5%	35	19.2%
上:換算 下:単純		個数	平均	最大	最少	a(1)	%	b(2)	%	c(3)	%	d(4)	%	e(5)	%
⑤高校サッカー	5~1の数値	1060	3.3			116	11.0%	32	3.0%	415	39.2%	371	35.0%	111	10.5%
⑤高校サッカー	5~1の数値	182	3.4	5	1	11	6.0%	14	7.7%	64	35.2%	72	39.6%	21	11.5%
上:換算 下:単純		個数	平均	最大	最少	a(1)	%	b(2)	%	c(3)	%	d(4)	%	e(5)	%
⑥プロ野球	5~1の数値	1060	3.3			83	7.9%	126	11.9%	376	35.5%	344	32.4%	111	10.5%
⑥プロ野球	5~1の数値	182	3.4	5	1	13	7.1%	21	11.5%	60	33.0%	63	34.6%	25	13.7%
上:換算 下:単純		個数	平均	最大	最少	a(1)	%	b(2)	%	c(3)	%	d(4)	%	e(5)	%
⑦高校野球	5~1の数値	1060	3.9			26	2.4%	70	6.6%	236	22.3%	366	34.5%	334	31.5%
⑦高校野球	5~1の数値	182	3.7	5	1	8	4.4%	17	9.3%	43	23.6%	67	36.8%	47	25.8%
上:換算 下:単純		個数	平均	最大	最少	a(1)	%	b(2)	%	c(3)	%	d(4)	%	e(5)	%
⑧大相撲	5~1の数値	1060	2.8			209	19.7%	156	14.7%	424	40.0%	195	18.4%	74	7.0%
⑧大相撲	5~1の数値	182	2.4	5	1	51	28.0%	33	18.1%	73	40.1%	19	10.4%	6	3.3%
上:換算 下:単純		個数	平均	最大	最少	a(1)	%	b(2)	%	c(3)	%	d(4)	%	e(5)	%
⑨プロバスケットリーグ(bリーグ)	5~1の数値	1060	2.7			189	17.8%	265	25.0%	373	35.2%	164	15.5%	56	5.3%
⑨プロバスケットリーグ(bリーグ)	5~1の数値	182	2.9	5	1	31	17.0%	37	20.3%	57	31.3%	41	22.5%	16	8.8%
上:換算 下:単純		個数	平均	最大	最少	a(1)	%	b(2)	%	c(3)	%	d(4)	%	e(5)	%
⑩実業団バスケットボール	5~1の数値	1060	2.6			178	16.7%	283	26.7%	417	39.4%	137	13.0%	37	3.5%
⑩実業団バスケットボール	5~1の数値	182	2.7	5	1	37	20.3%	37	20.3%	66	36.3%	32	17.6%	10	5.5%
上:換算 下:単純		個数	平均	最大	最少	a(1)	%	b(2)	%	c(3)	%	d(4)	%	e(5)	%
⑪東京五輪の招致活動	5~1の数値	1060	3.4			89	8.4%	47	4.4%	349	32.9%	450	42.5%	111	10.5%
⑪東京五輪の招致活動	5~1の数値	182	3.3	5	1	19	10.4%	12	6.6%	68	37.4%	64	35.2%	19	10.4%
上:換算 下:単純		個数	平均	最大	最少	a(1)	%	b(2)	%	c(3)	%	d(4)	%	e(5)	%
⑫選手のどんな点に感動	a~e(複可)	1060				692	65.2%	448	42.3%	490	46.2%	364	34.3%	483	45.5%
⑫選手のどんな点に感動	a~e(複可)	182				112	61.5%	97	53.3%	68	37.4%	65	35.7%	92	50.5%
上:換算 下:単純		個数	平均	最大	最少	a(1)	%	b(2)	%	c(3)	%	d(4)	%	e(5)	%
⑬文武両道	1~3	1060	1.7			411	38.7%	585	55.2%	65	6.1%				
⑬文武両道	1~3	182	1.6	3	1	77	42.3%	93	51.1%	12	6.6%				
上:換算 下:単純		個数	平均	最大	最少	a(1)	%	b(2)	%	c(3)	%	d(4)	%	e(5)	%
⑭Jチーム名	1, 2	1060	1.3			774	73.0%	286	27.0%						
⑭Jチーム名	1, 2	182	1.2	2	1	142	78.0%	40	22.0%						
上:換算 下:単純		個数	平均	最大	最少	a(1)	%	b(2)	%	c(3)	%	d(4)	%	e(5)	%
⑮選手名	1, 2	1060	1.6			372	35.0%	689	65.0%						
⑮選手名	1, 2	182	1.6	2	1	73	40.1%	109	59.9%						
上:換算 下:単純		個数	平均	最大	最少	a(1)	%	b(2)	%	c(3)	%	d(4)	%	e(5)	%
⑯代表本田、香川以外	1, 2	1060	1.2			896	84.5%	165	15.5%						
⑯代表本田、香川以外	1, 2	182	1.1	2	1	158	86.8%	24	13.2%						
上:換算 下:単純		個数	平均	最大	最少	a(1)	%	b(2)	%	c(3)	%	d(4)	%	e(5)	%
⑰日立サンロッカーズ	1, 2	1060	1.8			180	17.0%	880	83.0%						
⑰日立サンロッカーズ	1, 2	182	1.9	2	1	22	12.1%	160	87.9%						
上:換算 下:単純		個数	平均	最大	最少	a(1)	%	b(2)	%	c(3)	%	d(4)	%	e(5)	%
⑱フットサル	1~4	1060	2.6			196	18.5%	70	6.6%	774	73.0%	21	1.9%		
⑱フットサル	1~4	182	2.1	4	1	73	40.1%	17	9.3%	89	48.9%	3	1.6%		
上:換算 下:単純		個数	平均	最大	最少	a(1)	%	b(2)	%	c(3)	%	d(4)	%	e(5)	%
⑲スポーツ活動を?	1~3	1060	2.1			287	27.0%	348	32.8%	426	40.2%				
⑲スポーツ活動を?	1~3	182	1.9	3	1	76	41.8%	49	26.9%	57	31.3%				
上:換算 下:単純		個数	平均	最大	最少	a(1)	%	b(2)	%	c(3)	%	d(4)	%	e(5)	%
⑳活動の障害になる点	a~e(複可)	766				340	44.3%	176	22.9%	341	44.4%	177	23.0%	30	3.9%
⑳活動の障害になる点	a~e(複可)	134				41	30.6%	35	26.1%	42	31.3%	36	26.9%	33	24.6%
上:換算 下:単純		個数	平均	最大	最少	a(1)	%	b(2)	%	c(3)	%	d(4)	%	e(5)	%
㉑種目		199													
㉑種目		58													
上:換算 下:単純		個数	平均	最大	最少	a(1)	%	b(2)	%	c(3)	%	d(4)	%	e(5)	%
㉒選手登録	1, 2	490	1.9			55	11.1%	435	88.9%						
㉒選手登録	1, 2	86	1.6	2	1	37	43.0%	49	57.0%						
上:換算 下:単純		個数	平均	最大	最少	a(1)	%	b(2)	%	c(3)	%	d(4)	%	e(5)	%
㉓睡眠時間	0.5単位	1060	6.0	10	2										
㉓睡眠時間	0.5単位	182	6.2	10	2										
上:換算 下:単純		個数	平均	最大	最少	a(1)	%	b(2)	%	c(3)	%	d(4)	%	e(5)	%
㉔睡眠不足の影響は?	1~3	1060	1.8	3	1	538	50.7%	183	17.3%	339	32.0%				
㉔睡眠不足の影響は?	1~3	182	2.0	3	1	81	44.5%	25	13.7%	76	41.8%				

それもまた“スポーツと地元”の課題と言えるだろう。

東京五輪で、日本のスポーツはさらに盛んになるかもしれないが、肝心なことは、“地元”の各家庭、各個人が「実際に」より多くスポーツ活動を行い、スポーツへの外面・内面両方をより深く理解することではないだろうか。

その意味で、“地元”研究調査は、それなりの意義があったと感じる。

なお、集計の方法、さらに詳細な分析、あるいはこれまでの国や組織の行った調査結果との比較、また調査で記録している個別インタビュー（聞き取りの部分）のまとめや記録など、今回の基礎調査を土台にさらに深く、広く研究する余地が無限に残されており、それらに向かってチャンスを生かしていく所存である。

この研究調査にあたり、ご協力を賜った柏市警察署、江戸川大学学長、および調査に参加した学生諸君にこの場をお借りして深く感謝申し上げます。

付録データ

なお、「若年層、年配層のウエイトを考慮して、採取計する必要もある」との考察から、総務省統計局資料＝図＝をもとに、若年層（平成生まれ）と大人世代（それより高齢）の比率が約1：7で

あることを確認。（務省統計局資料 <http://www.stat.go.jp/data/jinsui/2006np/> から）。よって、大人世代のサンプル数を18.56418倍して、全体のデータを返還、再編集してみた。項目によっては、選手登録者の割合など、10%以上の差異があったが、ほとんどの項目では予想の範囲内で、単純集計と大きな差は見られなかった。

表16が、年齢による人口分布の割合を元に換算再編集した全体のデータである。

参考文献

- * 「Jリーグ観戦者調査2012年サマリーレポート」(Jリーグ発行)
<http://www.j-league.or.jp/aboutj/document/pdf/spectators-2012.pdf>
- * 総務省統計局資料 <http://www.stat.go.jp/data/jinsui/2006np/>
- * 文部科学白書 > 平成22年度文部科学白書 > 特集1 スポーツ立国の実現 ほか
- * 内閣府「体力・スポーツに関する世論調査」に基づく文部科学省推計（成人の週1回以上スポーツ実施率の推移）
http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/jisshi/_icsFiles/afildfile/2010/06/29/1294610_1.pdf
- * 世界経済フォーラム <http://www.weforum.org/>
- * 同世界男女格差報告書
http://www3.weforum.org/docs/WEF_NR_GGGR_Asia_Report_2013_JP.pdf
- * 内閣府男女共同参画局
<http://www.gender.go.jp/>
- * 第3次男女共同参画基本計画における成果目標の動向
http://www.gender.go.jp/kaigi/senmon/kansi_senmon/18/pdf/kansi_giji_07.pdf
- * GMIレーティングス 世界ランキング統計局
<http://10rank.blog.fc2.com/blog-entry-252.html>